

〈論 文〉

軍政下ブラジルの記録映画に描かれた ヴァルガスのカリスマ性

住 田 育 法

キーワード

記録映画, カリスマ, 民主主義, 選挙運動, ポピュリズム, ナショナリズム

Resumo

De acordo com os documentários produzidos durante o regime militar no Brasil (1964 – 1985): *Getúlio Vargas, Os anos JK e Jango*, pretendo analisar a importância das imagens que retratam o presidente Getúlio Dorneles Vargas.

Após a República Velha (1889 – 1930), época da soberania política da elite mineira e paulista, chamado de período “café com leite” (quando se alternavam candidatos de São Paulo e de Minas Gerais), a Ditadura Vargas (1930 – 1945) se estabeleceu fortemente contra esse acordo vigente. Pode-se perceber que a influência política de Vargas só terminou na década de 1990, com a emergência de F. H. C. (Fernando Henrique Cardoso).

Há 37 anos atrás, quando frequentava o curso de Pós-graduação do Instituto de Letras, no Rio de Janeiro, enquanto aluno do convênio da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto com a Universidade Federal Fluminense, tive oportunidade de ler vários artigos publicados em revistas e jornais, bem como assistir ao documentário sobre Getúlio Vargas.

Em agosto de 2004, no 50º aniversário de sua morte, ao visitar Niterói, participei da conferência evocativa dos 50 anos da morte de Getúlio e também pude ler alguns artigos de revistas e jornais então publicados.

Da análise efetuada, parece-me que ainda existem muitos getulistas no Rio, visto que Vargas atribuiu a esta cidade, capital federal naquela época, uma importância especial para a centralização do Brasil. Por outro lado, os paulistas parecem não gostar de Vargas devido à revolução trágica dos constitucionalistas de 1932.

Nos três filmes referidos, observei as imagens que revelam o aspecto carismático de Getúlio Vargas.

I はしがき

2010年における、ブラジルという国家の国際舞台における政治的、経済的な役割の高まりの中で、1980年にルイス・イナーシオ・ルラ・ダ・シルヴァ（Luiz Inácio Lula da Silva 生1945年ー、以下、ルラと記す）で始まったABCパウリスタ地区の労働運動が、新しい展開を迎えている。9年前の2002年大統領選挙にはルラが、新自由主義を掲げる与党ブラジル社会民主党（PSDB）と

ブラジル民主運動党 (PMDB) が支持する候補者セーラに対して、新ポピュリズムとも呼べる新風を巻き起こして闘い、決選投票ではブラジル民主運動党 (PMDB) も取りこんで野党であった労働者党 (PT) が勝利した。この状況が 2010 年の大統領選挙においては、全国レベルでは、北東部の貧困地域、大都会では、古都リオデジャネイロのように低所得者層の居住区が労働者党 (PT) のデイルマ・ルセフ (Dilma Rousseff 生 1947 年 -、以下、デイルマと記す) を推し、裕福な南部・南東部や瀟洒な都市環境の住民は、反デイルマの姿勢を鮮明としたのである¹⁾。選挙に勝利できたのは、強力なルラ主義を徹底させたことによるものであった。それは、過去のカリスマ的政治家のジェトゥリオ・ドルネーレス・ヴァルガス (Getúlio Dornelles Vargas 生 1882 - 没 1954 年、以下、ヴァルガスと記す) やミナス・ジェライス州出身のジュセリーノ・クビシェッキ・デオリヴェイラ (Juscelino Kubitschek de Oliveira 生 1902 - 没 76 年、以下、クビシェッキと記す) が見せた、ブラジル国民への楽観的な期待の表現に繋がるものであろう。ヴァルガスの「ブラジリダーデ」であり、クビシェッキの「50 年の進歩を 5 年で」という開発優先の理念である。ルラが見せたのは、貧者も富者も共に豊かな誇り高いブラジルの前進である。これに、BRICS の一員であるという楽観的な国際的評価や資源大国の現実、中間層増加などの現実が高い支持層に繋がったのである。決して、貧者のみの政策が成功したのではない。

本稿では、20 世紀に労働者の地位向上に努めたカリスマ²⁾ 指導者ヴァルガスを描いた記録映画がブラジル軍政下の 1974 年に公開された³⁾ 点に注目して、ブラジル政治における映像文化の重要性を考察しようとするものである。政治を扱った記録映画を検閲の厳しい時代に制作するにあたって、映画人がどのように客観性を求めたのかについても観察したい。

II 軍事政権とブラジル映画

1964 年 3 月の軍部のクーデターによってジョアン・ベルシオール・マルケス・ゴラル (João Belchior Marques Goulart 生 1918 - 没 76 年、愛称 Jango (ジャンゴ)、以下、ゴラルと記す) の左翼的民族主義の政権が否定され、開発優先の権威主義的政府が誕生した。これによって、親米反共の軍事政権が 21 年間続き、大統領全員が軍人という、いわば軍部主導の政権であったため、人権抑圧などの暗い側面もみられた。1964 年 4 月にクーデターを指揮したウンベルト・デ・アレンカール・カステロ・ブランコ (Humberto de Alencar de Castello Branco 生 1897 - 没 1967 年、以下、ブランコと記す) 将軍が大統領に就任し、65 年の軍政令第 2 号の公布により、既存政党の解散と与党の国家革新同盟 (ARENA) と野党のブラジル民主運動 (MDB) の 2 大政党制への再編がなされた。1967 年のアルトゥール・ダ・コスタ・イ・シルヴァ (Arthur da Costa e Silva 生 1902 - 没 69 年) 大統領の就任時に、ブランコによって準備された新憲法が発効したが、シルヴァ大統領は 1968 年に軍政令第 5 号を公布し、1967 年憲法では謳っていない大統領の非常大権を承認させた⁴⁾。

ここで「ヴァルガス革命」から軍政誕生に至る略年表を示しておきたい。

1930 年 「ヴァルガス革命」。

1932 年 サンパウロの反ヴァルガス内戦。

1937 年 ヴァルガス「新国家体制」樹立。

- 1945年 ヴァルガス「ブラジル労働党」結成。ヴァルガス下野。
- 1950年 ヴァルガス大統領選挙に当選。
- 1951年 ヴァルガス大統領就任。
- 1953年 ヴァルガスが労相にゴラル、法相にタンクレード・デ・アルメイダ・ネヴェス (Tancredo de Almeida Neves 生1910-没85年, 以下, ネヴェスと記す) 任命。
- 1954年 ヴァルガス自殺。
- 1955年 クビシェッキ大統領に当選。
- 1956年 クビシェッキ大統領就任, ゴラル副大統領に。
- 1959年 キューバ革命。
- 1960年 クアドロスが大統領に, ゴラルが副大統領に当選。ブラジリア遷都。ゴラル, ソ連訪問。
- 1961年 副大統領ゴラル, 毛沢東の中国訪問。ゴラル昇格により大統領就任。ネヴェス首相に就任。
- 1962年 ネヴェス首相辞任。
- 1963年 米国, ケネディー暗殺。
- 1964年 クーデターにより軍事政権発足。米国, クーデター支持。ゴラル, ウルグアイに亡命。

軍政下における「新しい映画」第2期⁵⁾は、軍政開始の1964年から、検閲などを定めた悪名高い「軍政令第5号」が布告された1968年までである。ポピュリズム対権威主義、という対立の構図が顕著となる中で、グラウベル・ローシャ (Glauber Rocha 生1939-没81年, 以下, ローシャと記す) 監督の『狂乱の大地』(1967年) が発表されている。

これに先立つ軍政直前の1963年に、グラシリアーノ・ラモス・デ・オリヴェイラ (Graciliano Ramos de Oliveira 生1892-没1953年, 以下, グラシリアーノ・ラモスと記す) の小説を映画化したネルソン・ペレイラ・ドス・サントス (Nelson Pereira dos Santos 生1928年-, 以下, ネルソンと記す) 監督の『乾いた人生』が発表され、これが「新しい映画」第一期の代表的作品とみなされた。さらに、日本では『黒い神と白い悪魔』の題で公開された、ローシャ監督の『太陽の地の神と悪魔』(1963年) などが制作されている。ネルソン監督の『乾いた人生』(1963年) は、はじまりと終わりが同じような場面になっている。映画の最初の画面では、近くを通る牛車の軋む音が聞こえる中、乾いた大地に貧しい牧夫の家族が現われる。映画の最後は、再びめぐってきた干ばつから逃がれて、近くに牛車の音を聞きながら、主人公たちが乾いた大地に消えていく映像となっている。殺人の場面が頻繁に登場するブラジル映画のなかで、そうした暴力シーンがないことから、この作品は教育の現場でもよく利用されている。ネルソン監督が文学作品を利用したのは、自ら作品のシナリオを書くことで悩んだ末に、すでに乾燥の大地の生活を巧みに描写した名作を利用することにしたという経緯⁶⁾によるが、結果として、ナショナリズムを掲げる軍事政権の検閲を逃れることができたと判断できる。ローシャ監督の『太陽の地の神と悪魔』も、『乾いた人生』同様、はじまりのシーンが印象的である。ヴィラ・ロボス (生1887-没1959年) の曲とともにタイトルバックで登場するのは、北東部の半乾燥地帯の空からの風景である。主人公の牧童が、地方ボス (coronel) である地主を山刀で殺し、追っ手の用心棒の攻撃に立ち向かう場面には、ヴィラ・ロボスの曲が利用され、映像とのコンビネーションが見事である⁷⁾。ローシャ

監督の作品は北東部のコルデル文学（Literatura de cordel 紐の文学⁸⁾）にテーマを求めることで検閲を回避できたといえる。

「軍政令第5号」布告の翌1969年にシルヴァが病死したため、軍の評議会は後継大統領にエミリオ・ガラスターズ・メディシ（Emílio Garrastazu Médici 生1905-没85年、以下、メディシと記す）を選出した。このシルヴァとメディシの2つの政権で、軍部の政治力を基盤に経済の専門家などの技術官僚を積極的に登用し、識字運動などの社会統合によって近代化を目指す、開発戦略3カ年計画（1968-70）が実施された。続いて国民のさらなる所得増を目的とした第1次国家開発計画（1972-74）が実行され、「奇跡」と呼ばれた高度成長期を迎える。それは数字の上で、年率10%前後を維持し続けた経済成長率のみではなく、総合的な開発計画により社会的間接資本の整備が進み、工業化も輸出競争に耐えるまでに達した成長の過程であった。しかし貧富の格差が拡大し、やがて世界経済の後退と民主化を求める国民の声が高まる中、経済の開放と政治の民主化を選択することになる⁹⁾。

「新しい映画」の第3期は、軍政の弾圧や検閲をかわすために、寓意や文学、歴史のなかにテーマを求めることになるが、1968年から1972年までという、「新しい映画」最後の時期である。1969年にはブラジル映画配給公社（EMBRAFILME）が創設され、軍事政権の指導のもとに、映画制作がすすめられることになった。この時期の代表作は、ローシャ監督の『太陽の地の神と悪魔』の続編『アントニオ・ダス・モルテス（聖戦士に対する悪しき竜）』（1968年）、ジョアキン・ペドロ・デ・アンドラデ（生1932-没88年）監督の『マクナイーマ』（1968年）、ネルソン監督の『わたしが食べたフランス人』（1970年）などである。

白黒作品の『狂乱の大地』や『太陽の地の神と悪魔』と違って『アントニオ・ダス・モルテス（聖戦士に対する悪しき竜）』（1969年）は、ローシャ監督のカラー作品である。そのため、北東部奥地の絵画的な風景や色彩豊かな人びとの衣裳、さらにフォルクローレの唄などを堪能できる内容になっている。とくに、軍政の検閲をかわすために、寓意がこめられた婉曲な表現となっている。結果として、この曖昧さゆえに、ブラジル社会の抱える多元性や移動性を描いているといえる。地主に雇われた用心棒（ジャグンソ）が匪賊（カンガセイロ）に変身し得るし、その逆もある。伝統的な支配者である地主が民衆に勝利することもあるし、土地を持たない民衆が地主に勝利することもある。映画の最後で勝利するのは、奴隷のような立場の黒人の聖戦士であり、成敗されたのは悪しき竜たる地主であるが、竜は「軍政」を連想させる¹⁰⁾。

III 「政治開放」以降の映画

1974年に就任したエルネスト・ガイゼル大統領が進めた「民主主義への漸進的移行」と「政治開放」のもとで新聞や映画などの検閲が軽減され、この開放政策を後任のジョアン・フィゲイレード大統領がさらに拡大させ、79年に政党結成を認める新法が成立した。与党の国家革新同盟（Arena）が民主社会党（PDS）に、野党のブラジル民主運動がブラジル民主運動党（PMDB）にそれぞれ生まれかわった。サンパウロの労働運動から労働者党（PT）が結成され、民主労働党（PDT）やブラジル労働党（PTB）も登場した¹¹⁾。

ヴァルガスの棺の横に、クビシェッキ、ゴラール、ネヴェスが寄り添い、ヴァルガスの遺書の朗読ではじまる、アンナ・カロリーナ（Ana Carolina 生1949年-）監督・著作の記録映画『ジェトゥウ

リオ・ヴァルガス』(1973-74年)¹²⁾が、1974年に公開された(写真1)。ヴァルガスの自殺から20年目のこの作品は、後の民主化を予感させた。その10年後の大統領選挙でネヴェスが当選を果たしたのである。

さらに、「民主主義への漸進的移行」と「政治開放」のもとで19世紀の小説『イラセマ』の登場人物、インディオの娘と白人の征服者の関係を隠喩に用いて、アマゾン縦断自動車道路に代表される軍政下のアマゾン開発の陰に存在する惨めな現実を批判した、ジョルジェ・ボダンスキ(Jorge Bodanzky 生1942年-)監督の『イラセマ』(1974年)が作られた。同じくアマゾン開発に疑問を投げかけた作品では、カカ・ディエーゲス(Cacá Diegues, 本名 Carlos Diegues 生1940年-)監督の『バイバイ、ブラジル』(1979年)が優れている。シコ・ブアルケ・デオランダ(Chico Buarque de Hollanda, 本名 Francisco Buarque de Hollanda 生1944年-)がテーマ曲を歌い、ベティ・ファリア

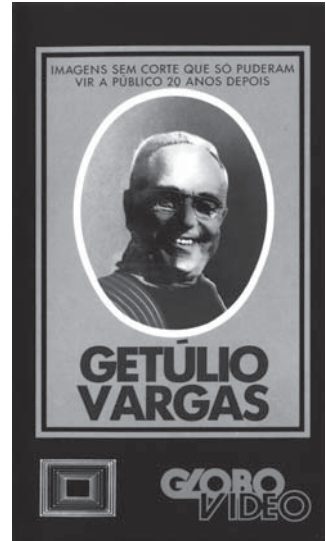


写真1 ビデオの表紙

ア(Betty Faria, 本名 Elisabeth Maria Silva de Faria 生1941年-)やジョゼ・ヴィルケル(José Wilker de Almeida 生1947年-)、ファビオ・ジュニオル(Fábio Júnior, 本名 Fábio Correa Ayrosa Galvão 生1953年-)らが出演し、海外の興業でも成功を収めた。

ブラジルに帰化したアルゼンチン生まれのエクトール・バベンコ(Héctor Eduardo Babenco 生1946年-)監督の『ルーシオ・フラヴィオ、傷だらけの生涯』(1977年)も、軍政下の警察組織の腐敗を暴露した作品である。バベンコはこの他、ストリートチルドレンの問題を扱った『ピシヨット』(1980年)や牢獄内の描写が評判となった話題作『蜘蛛女のキス』(1984年)を発表している。

ブラジル人を「ガイジン」と呼ぶ、サンパウロに渡った日本人移民を扱ったチズカ・ヤマザキ(Tizuka Yamasaki 生1949年-)監督の『ガイジン、自由への道』(1979年)やサンパウロの労働運動を取りあげ、女優フェルナンダ・モンテネグロ(Fernanda Montenegro 生1929年-)が



写真2 DVDの表紙

妻と母親役をみごとに演じ、ベネチア映画祭でグランプリを受賞したレオン・イルツマン(Leon Hirszman 生1937-没87年)監督『彼らは喪服を着ない』(1980年)もこの時期の作品である。さらにこのとき、クビシェッキを中心にヴァルガス自殺から軍事クーデターまでの政治史を描いた、後で述べるシルヴィオ・テンディレル(Silvio Tendler 生1950年-)監督の記録映画『JK時代—ある政治的軌跡』(1980年)¹³⁾が、一般の映画館で上映され、好評を博した(写真2)。

この他、文学作品に基づくものに、ジョルジェ・アマード(Jorge Leal Amado de Faria 生1912-没2001年)の小説を映画化したブルーノ・バレット(Bruno Barreto 生1955年-)監督の『フロール婦人とふたりの夫』(1976年)と同監督の『ガブリエラ』(1984年)、グラシリアーノ・ラモスの小説を扱った、ネルソン監督の『牢

獄の思い出』(1983年)がある。

記録映画では軍政終焉前年の1984年に、シルヴィオ・テンディレーレ監督がゴラールを描いた『ジャンゴ』(1984年)¹⁴⁾を制作している(写真3)。当時の政治の展開をみると、大統領直接選挙を実施する憲法修正案が1984年に連邦議会で否決されたため、民政移管は、1985年の間接選挙によって実行されることになった。軍政継承の民主社会党(PDS)が支持するパウロ・マルーフ(Paulo Salim Maluf 生1931年-)と、自由戦線(PFL)とブラジル民主運動党(PMDB)が推す民主同盟(AD)のネヴェスが立候補し、国会議員全員と州議会代表からなる代議員投票でネヴェスが勝利した。しかし、ヴァルガス政権の大臣や1962年の議院内閣制の首相を歴任した高齢のネヴェスは、病気で急逝し、マラニオン州出身のジョゼ・サルネイ(José Sarney 生1930年-)副大統領が大統領に昇格した。軍政期には民主社会党の党首であったサルネイが、大統領選挙のときは、ブラジル民主運動党に入党し、軍政2大政党の与党と野党は流れをひとつにして、軍政が終わったのである。



写真3 DVDの表紙

IV 記録映画『ジェットウリオ・ヴァルガス』に描かれたカリスマ性

1974年に、ブラジル国リオデジャネイロ(以下、リオと記す)州ニテロイ市にあるフルミネンセ連邦大学(UFF)に留学¹⁵⁾していたとき、ヴァルガス没後20年という節目の年であったため、筆者は、雑誌の特集記事や記録映画を見る機会に恵まれた。さらに、没後50年の2004年8月にも筆者はニテロイ市に滞在し¹⁶⁾、ヴァルガス政府批判の映画「オルガ」¹⁷⁾を見たり、記念のシンポジウムに参加することができ、リオやサンパウロの新聞の特集記事¹⁸⁾を読むことができた。その成果についてはすでに発表している¹⁹⁾が、本稿では記録映画『ジェットウリオ・ヴァルガス』に描かれた指導者ヴァルガスのカリスマ性の視点から、再び考察するものである。

ヴァルガスの支持者はリオに多く、逆にサンパウロでは、ヴァルガスの業績は否定的に見られているようである。その理由は、ヴァルガスが首都リオを国家統合の拠点として重視し、今でも市民が誇りとする文化遺産²⁰⁾がリオには残っているが、逆にサンパウロでは、ヴァルガス政権が激しく攻撃した1932年護憲革命²¹⁾の悲劇が未だ鮮明に記憶されているからであろう。また、研究分野別に見ると、一般に歴史家の場合、ヴァルガスへの評価が高いが、ジャーナリストや作家では、その評価は低くなっている。要するに、ヴァルガスが生きた時代に、ブラジルという国が近代化を進め、世界にその存在を強くアピールし始めたことが歴史家によって評価²²⁾され、他方、ヴァルガス政府の最悪の政策が「検閲」であったとみなされる²³⁾ため、報道や出版に携わる人たちにとってヴァルガスは、とうてい容認できない「独裁者」であったと判断される。

ヴァルガス大統領については、演説集²⁴⁾や日記²⁵⁾などを初めとして多くの資料が存在する。こうした状況に加えて、衝撃的な自殺を遂げてちょうど半世紀以上が経ったことから、2004年には記念出版²⁶⁾や報道機関の記念シンポジウムなど²⁷⁾が開催され、特別にさらに多くの資料を入手することが可能となっていた²⁸⁾。

死に際して残した遺書²⁹⁾もよく知られているが、これはヴァルガスの側近のマシエル・フィーリョ (Maciel Filho) の「作文」であった³⁰⁾。

ヴァルガスの「遺書」はブラジルにおいて歴史教科書に全文が紹介されている³¹⁾し、記録映画『ジェットウリオ・ヴァルガス』(1973年)は冒頭、ヴァルガスの棺の横にクビシュッキ、ゴラール、タンクレド・ネヴェスが寄り添い、ヴァルガスの「遺書」の朗読で始めている。

軍政下の未だ検閲が厳しい状況の中で、労働者の地位向上を主張するポピュリスタ・ヴァルガスの考えを強く訴えるために、映画においても「遺書」の全文を発表したのであろう。

興味深いのは、ヴァルガスが生前に演説でよく用いた *trabalhador* (労働者) の語は1度のみであるが、*povo* (民衆、もしくは国民) は10回出ていることである。さらに、*espoliação* (搾取)、*escravo* (奴隷) がそれぞれ3度、*sangue* (血) が4度用いられている。非識字者の多いブラジル国民に対して、わかりやすく、しかし強烈なメッセージを残すことになったヴァルガスの遺書の全文を以下に拙訳を添えて載せておく。³²⁾

Mais uma vez as forças e os interesses contra o povo coordenaram-se e novamente se desencadeiam sobre mim. Não me acusam, insultam; não me combatem, caluniam-me; não me dão o direito de defesa. Precisam sufocar a minha voz e impedir a minha ação, para que eu não continue a defender como sempre defendi o povo e principalmente os humildes. Sigo o destino que me é imposto. Depois de decênios de domínio e espoliação dos grupos econômico-financeiros internacionais, fiz-me chefe de uma revolução e venci.

またもや、国民に対抗する勢力や利害が改めて結束し、私に襲いかかってきた。彼らは私を非難するかわりに侮辱する。私と戦うかわりに中傷する。そして、弁護する権利を与えない。彼らは、私が今までと変わらず、国民、とくに貧しい人々を守り続けることができないようにするために、私の声を封じ、私の行動を阻む必要がある。私は自分に課せられた運命に従う。何十年にもわたる経済・金融グループによる支配と搾取のすえ、私は革命を起こして勝利した。

Iniciei o trabalho de libertação e instaurei o regime de liberdade social. Tive de renunciar. Voltei ao governo nos braços do povo. A campanha subterrânea dos grupos internacionais aliou-se à dos grupos nacionais revoltados contra o regime de garantia do trabalho. A lei de lucros extraordinários foi detida no Congresso. Contra a justiça da revisão do salário mínimo se desencadearam os ódios. Quis criar liberdade nacional na potencialização das nossas riquezas através da Petrobrás e, mal começa esta a funcionar, a onda de agitação se avoluma. A Eletrobrás foi obstaculada até o desespero. Não querem que o trabalhador seja livre. Não querem que o povo seja independente.

私は解放の仕事を始め、社会的な自由体制を創設した。一度は辞任せねばならなかった。しかし、私は国民の両腕に抱かれて政権に復帰した。国際的諸勢力による地下運動が、労働の権利を保障する体制を歓迎しない国内諸勢力と同盟を結んだ。法外な利潤に関する法律は議会で阻止された。最低賃金を見直すという正義に対し、憎悪が巻き起こった。私はペトロブラスを創設して、私たちの富を自由に利用できる道を選んだ。ペトロブラスが創業されるとすぐに、反抗の波が押

し寄せた。エレクトロプラスに対しても、無謀なまでの妨害が加えられた。労働者が自由になるのを、彼らは望まない。国民が自立するのを望まない。

Assumi o Governo dentro da espiral inflacionária que destruía os valores do trabalho. Os lucros das empresas estrangeiras alcançavam até 500% ao ano. Nas declarações de valores do que importávamos existiam fraudes constatadas de mais de 100 milhões de dólares por ano. Veio a crise do café, valorizou-se o nosso principal produto. Tentamos defender seu preço e a resposta foi uma violenta pressão sobre a nossa economia, a ponto de sermos obrigados a ceder.

急カーブを描くインフレーションが労働価値を破壊するときに、私は政権についた。外国系企業の利潤は年 500%に達していた。輸入品の申告額には虚偽があって、その差額は年間 1 億ドルを超えていた。コーヒー危機が到来し、その相場が下落した。私たちはコーヒー価格の維持を試みたが、それは我が国の経済に対する強烈な圧力となって跳ね返り、譲歩せざるを得なかった。

Tenho lutado mês a mês, dia a dia, hora a hora, resistindo a uma pressão constante, incessante, tudo suportando em silêncio, tudo esquecendo, renunciando a mim mesmo, para defender o povo, que agora se queda desamparado. Nada mais vos posso dar, a não ser meu sangue. Se as aves de rapina querem o sangue de alguém, querem continuar sugando o povo brasileiro, eu ofereço em holocausto a minha vida.

私は、毎月毎月、毎日毎日、毎時間毎時間、闘ってきた。絶え間ない執拗な圧力に抗して、今や見捨てられた民衆を保護するために、すべてに黙って耐え、すべてを忘れ、私自らを犠牲にしてきた。私はもはや私の血以外に民衆に与えうるものは何も無い。もし猛禽が誰かの血を欲し、ブラジル民衆の血を欲するのであれば、私は私の命を生贄として捧げる。

Escolho este meio de estar sempre convosco. Quando vos humilharem, sentireis minha alma sofrendo ao vosso lado. Quando a fome bater à vossa porta, sentireis em vosso peito a energia para a luta por vós e vossos filhos. Quando vos vilipendiarem, sentireis no pensamento a força para a reação. Meu sacrifício vos manterá unidos e meu nome será a vossa bandeira de luta. Cada gota de meu sangue será uma chama imortal na vossa consciência e manterá a vibração sagrada para a resistência. Ao ódio respondo com o perdão.

私は諸君らと絶えず共にあるためにこの道を選ぶ。諸君らが侮辱される時、私の魂は諸君らと共にあって苦しむであろう。飢えが諸君らの家の戸を叩くとき、諸君らの胸には諸君や諸君の子らのために闘う力が漲るであろう。諸君らが軽蔑される時、それに反抗する内面から出てくる力を諸君らは感ずるであろう。私の犠牲によって諸君らの団結が保たれ、私の名は諸君らが闘う諸君らの旗印になるであろう。私の血の一滴は、諸君らの意識の中で永遠の熱き炎となり、抵抗のための聖なる鼓動を保ち続けるであろう。憎しみに対して私は許しをもって応えよう。

E aos que pensam que me derrotaram respondo com a minha vitória. Era escravo do povo e hoje me liberto para a vida eterna. Mas esse povo de quem fui escravo não mais será escravo de ninguém. Meu sacrifício ficará para sempre em sua alma e meu sangue será o preço do seu resgate.

私を敗北させたと考える者たちには、私の勝利をもって応えよう。私は民衆の奴隷であったが、今、永遠の命に向けて私を解放させる。しかし、私を奴隷と見なしていた民衆は、もはや誰の奴隷にもならないであろう。私の犠牲は絶えずその魂の中に留まり、私の血は、その解放の代価となる。

Lutei contra a espoliação do Brasil. Lutei contra a espoliação do povo. Tenho lutado de peito aberto. O ódio, as infâmias, a calúnia não abateram meu ânimo. Eu vos dei a minha vida. Agora vos ofereço a minha morte. Nada receio. Serenamente dou o primeiro passo no caminho da eternidade e saio da vida para entrar na História.

私はブラジルの搾取と闘った。国民の搾取と闘った。私は胸を張って闘ってきた。憎悪や侮辱、中傷に動じなかった。私は諸君に私の生命を捧げた。今度は、私の死を捧げる。私は何も恐れない。冷静に、永遠への第一歩を踏み出し、人生に別れを告げて、歴史の中に入る。

ナレーターを務めた俳優のパウロ・セザール・ペレイオ（Paulo Cesar Pereio）が映画の冒頭に遺書の全文を静かに朗読し、映像には、すでに述べたように、ヴァルガスの棺の横に、クビシェツキ、ゴラルル、ネヴェスが寄り添う姿は、軍政下の1974年においては、ヴァルガスのカリスマ性への強い印象を映画の観客に与えたことは確かである。実際、10年後の1984年の大統領選挙でネヴェスが当選を果たしたのである。

V 結びにかえて—後継者クビシェツキとゴラルルの記録映画

マックス・ヴェーバーのいう「ある個人にそなわった非日常的な天与の資質（カリスマ）」をブラジルの政治家ヴァルガスは持っていたと指摘できる。そしてこれを高めたのは、ヴァルガス独裁の1930～45年、ポピュリスタ期の1950～1964年における、ラジオや映画などによる国家規模の宣伝によるものであった。民衆に対する宣伝の効果を知ったうえで、ヴァルガスは演説を行い、音楽や映像を支援したとみなしうる。重視した主張は、労働者の地位向上や民衆を豊かにする工業化の推進、広大な内陸部の開発などであった。さらにヴァルガス本人の意図を除外しても、特に重要なのは、民衆を魅了する言葉を散りばめた遺書を残して自ら自殺したという劇的な行為である。

「私はブラジルの搾取と闘った。国民の搾取と闘った。私は胸を張って闘ってきた。憎悪や侮辱、中傷に動じなかった。私は諸君に私の生命を捧げた。今度は、私の死を捧げる。私は何も恐れない。冷静に、永遠への第一歩を踏み出し、人生に別れを告げて、歴史の中に入る。」

未だ非識字者が多く、家父長主義や縁故主義の残る 1950 年代のブラジル社会にあっては、大切な「ボス」の死は、あたかもキリスト教の救世主イエスの死にも似た印象を民衆に与えたと考えられる。独立運動の犠牲者ティラデントスに重ねて理解できるイメージでもある。

記録映画『JK 時代—ある政治的軌跡』（1980 年）と『ジャンゴ』（1984 年）を観察すると、ヴァルガスのカリスマ性を後継者となるクビシェッキとゴラルが存分に活用していたことを観察できる。「50 年の進歩を 5 年で」という開発優先の楽観的な目標を掲げて米国に接近したクビシェッキの姿は、ヴァルガスの「ブラジリダーデ」重視の内陸部開発の姿に重なる。リオグランデスルのサンボルジャ出身のヴァルガスとゴラルは、同じガウショという点ですでに一致が見られるが、さらに労働者の味方、という主張も完全に共通している。『ジャンゴ』は 1961 年のゴラルの中国訪問の場面ではじまり、ソ連やキューバとの外交関係重視の姿勢も強調している。これはまさに、今日の労働者党政権の全方位外交を彷彿させるものであるが、当時はその外交姿勢によって米国の圧力を受け、1964 年の軍政誕生に至ることになった。

興味深いのはカリスマ指導者ヴァルガスの影響を強く意識した 2 つの記録映画が、軍政末期において、その終焉と民主化の高まりに大きな働きをなしたことである。観客の動員も『JK 時代—ある政治的軌跡』が 80 万人、『ジャンゴ』が 100 万人であったと伝えられている。いずれの作品においても、ヴァルガスの映像は、その棺に集まる民衆の姿で代表されている。

冒頭でも述べたように、21 世紀の今、ブラジルの国際社会における役割が高まる中で、労働者の立場を擁護する労働者党からルラというカリスマ性に富む指導者が誕生し、後継者のデイルマ大統領が、まさにヴァルガスに対するクビシェッキやゴラルのように、その権威を活用しようとしている。本稿の目的は両者の類似点を分析することではないが、ブラジルの指導者を理解するためには、個人にそなわった非日常的な天与の資質である「カリスマ」性に注目する必要があることは明示しておきたい。

注

- 1) 拙著「ブラジル 2010 年大統領選挙の地域性と労働者党ルラ主義の展開」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』第 10 号、2010 年。153-172 頁。
- 2) 正当な暴力行使という手段に支えられた、人間の人間に対する支配関係。被治者がその時の支配者の主張する権威に服従することが必要。その支配の内的な正当性の根拠の第一は「永遠の過去」がもっている権威である古い型の「伝統的支配」。第二が、ある個人にそなわった非日常的な天与の資質（カリスマ）がもっている権威で、その個人の啓示や英雄的行為その他の指導的資質に対する、まったく人格的な帰依と信頼に基づく支配、つまり「カリスマ的支配」である。これは、預言者や一政治分野における一選挙武侯、人民投票の支配者、偉大なデマゴグ（民衆政治家）や政党指導者がおこなう支配。第三が「合法性」による支配。[ヴェーバー、マックス（脇 圭平訳）『職業としての政治』岩波書店、2006 年、10-11 頁]
凡庸な人間から成り立っている政党の抽象的な綱領のためだけでなく、ある 1 人の人間のために心から献身的に働いているのだという満足感—すべての指導者資質にみられるこの「カリスマ的」要素—が近代的な政党組織の党員の精神的な動機の 1 つである。（同書、55 頁）
- 3) 拙著「没後 50 年目のヴァルガスの評価—20 世紀ブラジルの指導者像に関する一考察」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』第 4 号、2004 年。103-128 頁。

- 4) 拙著「新共和制時代の大統領」『ブラジル研究入門』晃洋書房, 2000年。204-205頁。
- 5) 拙著「ブラジルの映画」『ブラジル学を学ぶ人のために』世界思想社, 2002年。160-164頁。
- 6) 京都外国語大学主催講演会「映像と文化2010」講師:ネルソン監督, 2010年5月21日, 会場: 京都外国語大学171教室。この講演会でネルソン監督が詳しく語った。
- 7) 拙著, 同書, 166-168頁。
- 8) 中牧弘允「ブラジル民衆本, リテラトゥーラ・デ・コルデル」国立民族学博物館。
参照: <http://www.minpaku.ac.jp/e-news/126otakara.html>
- 9) 富野「軍事政権下 [1964-85年] の経済状況」, 同書, 173-193頁。
- 10) 「話題のブラジル映画」『住田研究室のページ』
参照: <http://www.kufs.ac.jp/Brazil/03docentes/sumida/filmesbr.html>
- 11) 参照: Boris Fausto, *História do Brasil*. Editora da Universidade de São Paulo, 2000 (8ª edição). pp. 488-512.
- 12) *Getulio Vargas*. 制作: 1973-74年, 公開: 1974年, 時間: 76分, ナレーター: Paulo Cesar Pereio, 監督: Ana Carolina Teixeira Soares, 著作: Ana Carolina Teixeira Soares と Manuel Mauricio Albuquerque, Globo Vídeo dirigido por Nei Sroulevich.
- 13) *Os Anos JK - Uma Trajetória Política*. 制作: 1980年, 時間: 110分, ナレーター: Othon Bastos, 監督: Silvio Tendler, 観客動員数 80万人。
- 14) *Jango*. 制作: 1984年, 時間: 117分, ナレーター: 『バイバイ, ブラジル』の José Wilker, 監督: Silvio Tendler, 音楽: Wagner Tiso と Milton Nascimento, サウンドトラックの「学生の心 (Coração de Estudante)」が「今すぐ直接選挙を (Diretas Já)」の歌となる。観客動員数 100万人。
- 15) 1973年12月-1974年11月, 日本国際教育協会学生会国際交流派遣奨学生としてブラジル国フルミネンセ連邦大学大学院文学部に留学。
- 16) 学内共同研究「ポルトガル語文化圏における都市形成の比較研究—17, 18, 19世紀の展開に焦点を絞って」のため, 2004年8月14日-30日, リオ州ニテロイ市に滞在。
- 17) Fernando Moraes, *Olga: A vida de Olga Benario Prestes, judia comunista entregue a Hitler pelo governo Vargas*. São Paulo: Companhia das Letas, 1994. この作品をグローボ社が映画化した。
- 18) Folha de São Paulo, 2004年8月22日(日): 50 Anos da Morte de Vargas: A desconstrução de Getúlio, Em 24 de agosto de 54, suicidou-se o presidente cujas políticas criaram o Brasil moderno; desde os anos 90, os governantes brasileiros tentam desmontar a herança da era getulista. A1-A8.
Jornal do Brasil, 2004年8月22日(日): Conferência Jornal do Brasil: Getúlio Vargas 50 anos depois, um tiro que atravessou a história. A11.
Jornal do Brasil, 2004年8月23日(月): Getúlio: As horas finais (1): A tempestade surpreende o senhor do tempo e do vento. A5-A6.
O Globo, 2004年8月24日(火): 'Vargas Agosto de 54: Modelo de Vargas não se aplica ao Brasil de hoje: Em debate no GLOBO, professores analisam a herança política, social e econômica 50 anos após a morte do presidente. 2ª edição 13.
O Globo, 2004年8月25日(水): 'Vargas teria motivo para se matar hoje'. Página 1. Vargas Agosto de 54: 'Vargas, se vivo, teria motivos para se matar': Presidente do TST diz que ameaça de flexibilização das leis trabalhistas faria seu criador pensar em suicídio. Homenagem com samba e arte: Exposição no Museu da República tem trabalhos inéditos e cenários históricos. Uma perícia histórica: Instrutor esvaziou quarto de Vargas. Anita Leocádia ganhará indenização: Filha de Olga Benário e Luiz Carlos Prestes receberá R\$ 100 mil em uma única parcela. No Rio, missa é rezada em memorial inacabado: Um dia após a inauguração, obra em praça continua e museu ainda tem de ser finalizado.

- 19) 参照：拙著「没後 50 年目のヴァルガスの評価—20 世紀ブラジルの指導者像に関する一考察」前掲書, 103–128 頁。
- 20) リオ市街を見下ろすコルコバードの丘に立つキリスト像は 1931 年に完成した。また、ヴァルガスが自殺した当時の大統領官邸のカテテ宮は、今日では共和国博物館となっていて、その中庭などは市民に、憩いの場を提供している。
- 21) 護憲運動（革命）を記念して、1997 年より、この運動（革命）勃発の 7 月 9 日がサンパウロ州において祭日になっている。およそ 3 万 5 千人のサンパウロ（護憲革命）軍が 10 万人の政府軍に対峙して戦い、サンパウロ軍のみで 830 名の兵が死亡したといわれる。この数は第二次大戦中連合軍としてイタリア戦線で戦ったブラジル軍の戦死者の 2 倍に達している。
参照：<http://www.tvcultura.com.br/aloescola/historia/cenasdoseculo/nacionais/revolucao32.htm>
- 22) 元フルミネンセ連邦大学 Hildiberto Cavalcanti Júnior 学長（歴史学）の説明による。
- 23) ネルソン監督の映画『獄中記』（1984 年）は、同名の小説『獄中記 Memórias do Cárcere, 1953 年』に基づいて、ヴァルガス政権下の「検閲」の犠牲者となったカルロス・ヴェレーザ（Carlos Vereza）演じるグラシリアーノ・ラモスの厳しい生活を描いている。
参考：<http://www.webcine.com.br/filmessi/memocarc.htm>
- 24) Vargas, Getúlio. *A Nova Política do Brasil. I Da Aliança Liberal às realizações do 1º ano de Governo: 1930–1931*. RJ. 1938. *Ibid., II O ano de 1932 ... A Revolução e o Norte: 1933*. RJ. 1938. *Ibid., III A Realidade Nacional em 1933 ... Retrospecto das realizações do Governo 1934*. RJ. 1938. *Ibid., IV Retorno à terra natal ... Confraternização sul-americana e A Revolução Comunista: Novembro de 1934 a Julho de 1937*. RJ. 1938. *Ibid., V O Estado Novo: 10 de Novembro de 1937 a 25 de Julho de 1938*. RJ. 1938. *Ibid., VI Realização do Estado Novo: 1 de Agosto de 1938 a 7 de Setembro de 1939*. RJ. 1940. *Ibid., VII No limiar de uma nova era: 20 de Outubro de 1939 a 29 de Junho de 1940*. RJ. 1940. *Ibid., VIII Ferro, Carvão, Petróleo: 7 de Agosto de 1940 a 9 de Julho de 1941*. RJ. 1941. *Ibid., O Brasil na guerra: 14 de Julho de 1941 a 1 de Janeiro de 1943*. RJ. 1943. *Ibid., X O Brasil na guerra: 1º de Maio de 1943 a 24 de Maio de 1944*. RJ. 1944.
- 25) Vargas, Getúlio. *Diário. Vol. I: 1930–1936*. SP, RJ. 1995. *Ibid., vol. II: 1937–1942*. SP, RJ. 1995.
- 26) Cony, Carlos Heitor. *Quem matou Vargas: 1954, uma tragédia brasileira*. 3ª ed.rev. e ampliada, São Paulo: Editora Planeta do Brasil, 2004. Aguiar, Ronaldo Conde. *Vitória na derrota: a morte de Getúlio Vargas: quem levou Getúlio ao suicídio?* Rio de Janeiro: Casa da Palavra, 2004.
- 27) – Conferência, Jornal do Brasil “Getúlio Vargas: um tiro que atravessou a História.” 2004年8月23日 9時–13時, 於：リオ市共和国博物館（カテテ宮）。
– ラジオ CBN のヴァルガス没後 50 年特別討論番組：
O jornalista Sidney Rezende mediu o terceiro debate da série “Vargas: 50 anos depois”, realizado pela Rádio CBN, o CPDOC da Fundação Getúlio Vargas e Museu da República no dia 17/08, no Rio de Janeiro, e cujo tema foi “O legado cultural da era Vargas”. Os participantes foram Carlos Heitor Cony, jornalista; Francisco Carlos Teixeira da Silva, professor de História moderna e contemporânea da UFRJ e doutor em História pela UFF e pela Universidade de Berlim; Ricardo Cravo Albin, historiador de MPB, crítico e comentarista; e João Máximo, jornalista e diretor da Associação Brasileira de Imprensa (ABI).
<http://radioclick.globo.com/cbn/editorias/debates.asp>
- 28) 参照：拙著「没後 50 年目のヴァルガスの評価—20 世紀ブラジルの指導者像に関する一考察」前掲書, 103–128 頁。

- 29) Silva, Francisco de Assis., *História do Brasil*. São Paulo: Moderna, 1992. p. 273
- 30) Carlos Heitor Cony: … Agora, essa carta foi feita à quatro mãos. O conteúdo é totalmente do Getúlio. Fica por conta do Maciel Filho, realmente, aquela frase final: “Deixo a vida para entrar na História.” Vargas: 50 anos depois. Terceiro debate “O jornalista Sidney Rezende mediou o terceiro debate da série ‘Vargas: 50 anos depois’, realizado pela Rádio CBN, o CPDOC da Fundação Getúlio Vargas e Museu da República no dia 17/08, no Rio de Janeiro, e cujo tema foi ‘O legado cultural da era Vargas’. Os participantes foram Carlos Heitor Cony, jornalista; Francisco Carlos Teixeira da Silva, professor de História moderna e contemporânea da UFRJ e doutor em História pela UFF e pela Universidade de Berlim; Ricardo Cravo Albin, historiador de MPB, crítico e comentarista; e João Máximo, jornalista e diretor da Associação Brasileira de Imprensa (ABI)” (<http://www.cbn.com.br>)
- 31) Idem, *Ibid.*, p. 273.
- 32) 和訳に際して、シッコ・アレンカール他著、東明彦他訳『ブラジルの歴史』明石書店、2003年、558頁や『バルガス以後』ラテン・アメリカ協会、143-144頁、『ブラジル—その歴史と経済』、啓文社、253頁などを参照した。

参考文献

- アレンカール、シッコ、ルシア・カルピ、マルクス・ヴェニシオリベイロ
2003 『ブラジルの歴史—高校歴史教科書』東明彦／アンジェロ・イシ／鈴木茂（共訳）、明石書店。
- 金七紀男・住田育法・高橋都彦・富野幹雄（共著）
2000 『ブラジル研究入門』、晃洋書房。
- ファウスト、ボリス
2008 『ブラジル史』鈴木茂訳、明石書店。
- 中牧弘允
2011 「ブラジル民衆本、リテラトゥーラ・デ・コルデル」国立民族学博物館。
<http://www.minpaku.ac.jp/e-news/126otakara.html>（アクセス日 2011年9月15日）
- 斉藤広志
1970 『バルガス以後—ブラジルの政治と社会（1930-19691）』ラテン・アメリカ協会（理事長・井沢実）。
- 住田育法
1996 「ブラジリダーデと映像文化」『京都外国語大学 COSMICA』XXV号。81-93頁。
2003 「ブラジルの政治と大衆文化」『京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所紀要』第3号。93-111頁。
2004 「没後50年目のヴァルガスの評価—20世紀ブラジルの指導者像に関する一考察」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』第4号。103-128頁。
2010 「ブラジル2010年大統領選挙の地域性と労働者党ルラ主義の展開」『京都ラテンアメリカ研

- 究所紀要』第10号。153-172頁。
- 2011 「話題のブラジル映画」『住田研究室のページ』
<http://www.kufs.ac.jp/Brazil/03docentes/sumida/filmesbr.html>(アクセス日2011年9月15日)
- 富野幹雄・住田育法(共編著)
2002 『ブラジル学を学ぶ人のために』, 世界思想社。
- ヴェーバー, マックス
2006 『職業としての政治』脇圭平訳, 岩波書店10-11頁, 55頁。
- Aguilar, Ronaldo Conde
2004 *Vitória na derrota: a morte de Getúlio Vargas: quem levou Getúlio ao suicídio?* Rio de Janeiro: Casa da Palavra.
- Tendler, Silvio (監督)
1980 *Os Anos JK—Uma Trajetória Política*. 時間: 110分, ナレーター: 『太陽の地の神と悪魔』の Othon Bastos (DVD).
1984 *Jango*. 時間: 117分, ナレーター: 『バイバイ, ブラジル』の José Wilker, 音楽: Wagner Tiso と Milton Nascimento (DVD).
- Burns, E. Bradford
1980 *A History of Brazil*. Second Ed., Columbia Univ. Press - New York.
- CBN (Central Brasileira de Notícias)
2004 “Ciclo de debates Vargas: 50 anos depois”
<http://radioclick.globo.com/cbn/editorias/debates.asp> (アクセス日2004年9月15日)
- Cony, Carlos Heitou
2004 *Quem matou Vargas: 1954, uma tragédia brasileira*. 3ª ed.rev. e ampliada, São Paulo: Editora Planeta do Brasil.
- Efdeportes
2003 “Brasil: futebol e identidade nacional”, Departamento de História Universidade, Federal do Paraná (Brasil)
<http://www.efdeportes.com/efd56/futebol.htm> (アクセス日2011年11月15日)
- Fausto, Boris
2000 *História do Brasil*. Editora da Universidade de São Paulo, (8ª edição). pp. 488-512.
- Folha de São Paulo
2004年8月22日(日) 50 Anos da Morte de Vargas: A desconstrução de Getúlio, Em 24 de agosto de 54, suicidou-se o presidente cujas políticas criaram o Brasil moderno; desde os anos 90, os governantes brasileiros tentam desmontar a herança da era getulista. A1-A8.

Franceschi, Humberto Moraes

2002 *A Casa Edison e seu tempo*. Sarapui-Rio de Janeiro.

Geosan

2004 “Geosan a Página da Geografia”

http://www.geosan.hpg.ig.com.br/brasil/brasil_divisao_regional.htm (アクセス日 2004 年 10 月 1 日)

O Globo

2004年8月24日(火) Vargas Agosto de 54: ‘Modelo de Vargas não se aplica ao Brasil de hoje’

Em debate no GLOBO, professores analisam a herança política, social e econômica 50 anos após a morte do presidente. 2ª edição 13.

2004年8月25日(水) Vargas Agosto de 54: ‘Vargas, se vivo, teria motivos para se matar’

Presidente do TST diz que ameaça de flexibilização das leis trabalhistas faria seu criador pensar em suicídio. Homenagem com samba e arte: Exposição no Museu da República tem trabalhos inéditos e cenários históricos. Uma perícia histórica: Instrutor esvaziou quarto de Vargas. Anita Leocádia ganhará indenização: Filha de Olga Benário e Luiz Carlos Prestes receberá R\$ 100 mil em uma única parcela. No Rio, missa é rezada em memorial inacabado: Um dia após a inauguração, obra em praça continua e museu ainda tem de ser finalizado.

JB online

2000 “César Maia é eleito no Rio”

<http://jbonline.terra.com.br/eleicoes/eleicoes.html> (アクセス日 2004 年 9 月 15 日)

Jornal do Brasil

2004 年 8 月 22 日 (日) Conferência Jornal do Brasil: Getúlio Vargas 50 anos depois, um tiro que atravessou a história. A11.

2004 年 8 月 23 日 (月) Getúlio: As horas finais (1): A tempestade surpreende o senhor do tempo e do vento. A5-A6.

Moraes, Fernando

1994 *Olga: A vida de Olga Benario Prestes, judia comunista entregue a Hitler pelo governo Vargas*. São Paulo: Companhia das Letas.

Partido dos Trabalhadores, Porto Alegre

2004 “O que é o Partido dos Trabalhadores”

<http://www.ptpoa.com.br/oque.htm> (アクセス日 2004 年 9 月 15 日)

Portal São Francisco

s.d. Revolução de 32

<http://www.portalsaofrancisco.com.br/alfa/revolucao-constitucionista/revolucao-constitucionista-1.php> (アクセス日 2010 年 9 月 15 日)

PTB

2004 “História do PTB - Getúlio Vargas”

http://www.camara.gov.br/lid.ptb/História_do_PTB_Getúlio_Vargas.htm (アクセス日 2004年9月15日)

Radiobras, Brasil Agora

2004 “Rio terá memorial em homenagem a Getúlio Vargas”

<http://www.radiobras.gov.br/materia.phtml?materia=197495&q=1&editoria=> (アクセス日 2004年8月24日)

Silva, Francisco de Assis

1992 *História do Brasil*. São Paulo: Moderna, p. 273

Soares, Ana Carolina Teixeira (監督)

1973-74 *Getúlio Vargas*. 公開：1974年，時間：76分，ナレーター：Paulo Cesar Pereio，著作：Ana Carolina Teixeira Soares, Manuel Mauricio Albuquerque, Globo Vídeo dirigido por Nei Sroulevich (ビデオ)。

Templos do Futebol

2004 “São Januário”

<http://www.templosdofutebol.hpg.ig.com.br/rj/Rio2.htm> (アクセス日 2004年10月1日)

Vargas, Getúlio

1938 *A Nova Política do Brasil. I Da Aliança Liberal às realizações do 1º ano de Governo: 1930 – 1931*. RJ.

1938 *Ibid., II O ano de 1932 ... A Revolução e o Norte: 1933*. RJ. 1938.

1938 *Ibid., III A Realidade Nacional em 1933 ... Retrospecto das realizações do Governo 1934*. RJ.

1938 *Ibid., IV Retorno à terra natal ... Confraternização sul-americana e A Revolução Comunista: Novembro de 1934 a Julho de 1937*. RJ.

1938 *Ibid., V O Estado Novo: 10 de Novembro de 1937 a 25 de Julho de 1938*. RJ.

1940 *Ibid., VI Realização do Estado Novo: 1 de Agosto de 1938 a 7 de Setembro de 1939*. RJ.

1940 *Ibid., VII No limiar de uma nova era: 20 de Outubro de 1939 a 29 de Junho de 1940*. RJ.

1941 *Ibid., VIII Ferro, Carvão, Petróleo: 7 de Agosto de 1940 a 9 de Julho de 1941*. RJ.

1943 *Ibid., O Brasil na guerra: 14 de Julho de 1941 a 1 de Janeiro de 1943*. RJ.

1944 *Ibid., X O Brasil na guerra: 1º de Maio de 1943 a 24 de Maio de 1944*. RJ.

1995 *Diário*. Vol. I: 1930 – 1936. SP, RJ. 1995. *Ibid., vol. II: 1937 – 1942*. SP, RJ.

Vianna, Hermano

1995 *O Mistério do Samba*. Rio de Janeiro.

1999 *The Mystery of Samba: Popular Music and National Identity in Brazil*. Edited & Translated by John Charles Chasteen, The Univ. of North Carolina Press.

Webcine

2004 “Arquivo de Filmes: Memórias do Cárcere”

<http://www.webcine.com.br/filmessi/memocarc.htm> (アクセス日 2004 年 9 月 16 日)

